

コラム おじいちゃん、おじいちゃんの霊界通信機のノート

霊界通信機の原理について語る

奏太のおじいちゃんはノートにどのようなことを書いていたのだろうか。それを少し覗いてみたいと思う。

おじいちゃんは、24世紀では誰もが疑わない霊界の存在が、21世紀の前半において、摩訶不思議な世界のように思われていることに非常にショックを受けた。おじいちゃんは口で言ってもわからない科学者たちにギャフンと言わせようと、晩年になって霊界通信機を作ることにした。

おじいちゃんはどう考えた。「目に見えないものしか信じないならば、目に見えない世界を目に見える形で証明しようではないか」と……。そこで霊界通信機の開発を行うこととした。

おじいちゃんは霊界通信機が完成する前に他界してしまったが、おじいちゃんはエジソンと違い、すでに24世紀で霊界通信機の存在を当たり前に知っている。その観点から霊界通信機の原理をノートに記述した。21世紀の世界において、霊界通信機の証明法を、おじいちゃんはこのノートに記載したのである。

【おじいちゃんのノート〜霊界通信機の原理（抜粋）】

霊界通信機の開発には2段階のプロセスがある

エジソンが生前、作ろうとした霊界通信機の製造方法を考えてみたい。まず、霊界通信機とは何か。どういう機械なのか。それを考えてみよう。

どうすれば霊界の人と会話ができるのだろうか。霊界の人は肉体がない。だから、い

くら話しかけても私たちは聞こえない。だとすれば、肉体がなくとも通信できる手段が必要である。肉体がなくても通信できる手段に何かがあるのだろうか。ここで、テレパシーと言う通信方法に着目してみたい。

テレパシーとは「念」による会話

テレパシーとは「念」による会話である。霊人には地上の人に声は伝えられなくても、「念」は伝えられると考えられるからである。霊人の「念」をセンサーによって、キャッチして、翻訳できたならば、会話ができる可能性があるはずだ。

第1段階 念に感応するセンサー（物質）の存在とその開発方法

故に、念に感応するセンサーの開発が第一段階になると考えられる。そうした霊や「念」に感応する物質は、存在するのか。広い意味で考えれば、「念」に感応する物質は存在する。

スプーンが「念力」によって曲がった例は数多くある。よく言われる「ラップ現象」と言って、霊現象の起きるときに、叩く^{たた}ような音がすると言われている。また、金属の刃物の切れ味は「念」の感応を受けやすい。

故に、必ずなんらかのセンサーは可能と思われる。例えば、「念力」によるスプーン曲げ実験を考えてみよう。

もし、スプーンが曲がるほどの衝撃がスプーンにかかったとした場合、その衝撃波は、センサーによって捕らえることはできるはずだ。スプーンが曲がるほどの衝撃波を、センサーで捕らえられないとは考えられない。

例えば脳波計のセンサーをスプーンに接続すれば、その衝撃波を「波長」「波形」として捕らえることができるはずだ。この延長線上で、普通の人の「念」に感応するセンサーを探すのだ。

エジソンは100年以内に霊界通信機は可能であると説いている。どのような霊界通信機を作ったとしても、「念」に感応するセンサーは不可欠であるはずだ。つまり、なんらかの「念」、あるいは「霊波」に感応する物質は必ず存在するということだ。まったくそういう物質が地球上に存在しないならば、エジソンであっても作れないからである。

だから、なんらかのセンサーとなる物質は、必ず存在する。

第2段階 センサーがキャッチした波動の翻訳方法

仮に何らかの「念」に感応するセンサーができたとしよう。第2段階は、このセンサーがキャッチした「波動」をどう解読するかである。

では仮に、霊人からの「念」によるメッセージをキャッチできたとしよう。それは、脳波計の波形のような信号であったとする。ではこれを言葉に翻訳できるのだろうか。

ここで「テレパシー通信機」を考えてみたい。霊人からの「念」をセンサーでキャッ

チできてもそれだけでは翻訳はできない。それだけでは、意思が伝わらないからだ。ではどうしたら、霊からの「波形」による信号を翻訳できるのか。

ここで、その「念」の翻訳のために、「テレパシー通信機」を作るのだ。まず、生きている人の「念」に感応するセンサーができたと仮定する。それも、「念」の違いによって、波形、波長の変化が異なるだけの繊細なものと仮定する。

まず、「はい」、「イエス」という「念」をテレパシー通信機のセンサーに向かって念じてみる。その波長、波形が、何度やっても同じであれば、それを「はい」、「イエス」という意味の波長として、言語認識が可能である。次に複数の人に同じ実験をして、その波長が共通するかを細かく確認する。

同じように今度は、「いいえ」、「ノー」という波長を登録する。こうやって、様々な言葉の意味の「念」を「波長」として翻訳するのである。こうして、「念」の波長の「データベース」を作り、「念波」を言葉に翻訳できる「テレパシー通信機」を作るの

である。これはそれだけ、「念波」の微妙な解析ができれば十分可能なはずだ。

霊人も、肉体人間も基本的に、「念」そのものは変わらないと考えられる。もし、人間の「念波」も、霊人の「念波」も同じ性質のものであれば、このテレパシー通信機での会話は可能なはずである。

後は霊人の「念波」をキャッチできるほど、繊細なセンサーを開発すればよい。もちろん、データベース解析が進めば、それを、機械による音声で翻訳することもできる。それは外国語の翻訳機と同じことだ。

結局、どういう形の霊界通信機であったとしても、「念波」をキャッチする「センサー」が不可欠であり、それを翻訳するシステムも不可欠と思われる。

このセンサーの開発と、「テレパシー通信機」が進化したもの、それが霊界通信機となるだろう。

(補足説明)

現在、神経工学が発達し、腕の神経の電気信号を読み取り、なくなった腕のロボットを動かすほどのセンサーが開発されている。またアメリカでは、「脳インターフェース」と言って、脳からの信号に直接反応するコンピューターがすでに開発されている。

現在、存在するセンサーや機器の中に、すでにそのまま使えるものもないとは限らない。新しいセンサーを開発する前に今ある、センサーを調べてみるのもよいだろう

あとがき

「恋は秘密のパスワード」、いかがでしたでしょうか。
本書は、「恋愛物語」としても「ファンタジー物語」としても楽しめる内容で、ストーリーの最後で、あおいの秘密のパスワードがようやく明かされることとなりました。

「恋は秘密のパスワード」はタイトルのとおり、「純愛」「恋愛」をメインのテーマとしていますが、「並行世界（パラレルワールド）」「タイムマシン」「霊界」「未来科学」「発明」「宇宙の秘密」などの多岐にわたるテーマを取り上げています。

ある人は、「パラレルワールド」の真相を知ることとなり、ある人は「霊界」の存在をはじめ知ることとなります。そして本書から、「未来科学」「未来産業」の大きなヒントを得る人も現れることと思います。

そのような意味において、本書はまさに、様々な秘密が明かされることになる、「秘密の本」であると言えるかもしれません。

私がなぜこのようなことを述べたのかと言えば、以前、本書の原稿案を偶然、知った人の中に、以前から霊界通信機を作ることを生涯の目標としていた人がいました。そして本書の内容の一部を知った時に、「私がずっと探していたのはこれだ！ 発明のための大きなヒントを得ることができた！」と感動的な感想を述べた人が実際にいたことにあります。

きっと本書を読まれた人たちの中にも、「未来産業のヒントに満ち溢れた内容であった」と感じる人もいるかもしれません。

本書を読まれた人たちの中から、「未来産業の大きなヒント」を得て、かつてのニュートン、エジソン、アインシュタインのように、近代科学の基礎を築く発明が実現するきっかけとなれば、私としても嬉しい限りであります。

今、人類には新たな希望や夢が必要と感じています。